

母の故郷①

——福永津義・人間とその仕事——

高橋 さやか

〔前言〕

母のことを書いてみないか、と多分に好意的な申し入れを頂いた。いろいろ引込み思案もあつたけれど、有難いきもちもあつて、書かせて頂くことにした。

母子二代の保育者は、他にもすぐれた方が少なからずいられると思う。娘の立場で母のことを書くのは、必ずしも当を得たものにはなり難いかとも思う。

今になって思えば、私は、母を他人にわたしたくなくかつたのだ、……子どものころ、親しい知人から「あなたたち子ども

にはご自分のお母さんの偉さがわからないでしょうけど……丁度富士山のとつべんにいる人に、富士山の高さがわからないように」と言われ、「富士山を麓から見ている人に、どうして富士山がわかるのか、富士の山頂に立つ者こそ、山に居てこそ、本当のその山のことがわかるはずだ」と、口には出さず、胸の中で言い返し思ひ募つたものであった。

面映いのをあえて言えば、たしかに私の母は、多くの人々から——周辺の、多少とも交わりをもつほどの人々から、親愛され敬重されていたし、それだけの人間味を十分にもつて

いた。みんなが頼りにし、悩みごとをうち明け、考え方のよりどころを求め、助けを得るために、母の許に出入りした。それは、実の子女たち（つまり私を長姉とする弟妹）にとつては、多少とも迷惑な、というより腹立たしい事実だった。「私の母なのに、いつもあなたたちは、私の母を奪ってしまっている」そういう不平を抱きながら、次第に、私は青年期をむかえたようである。

本当は文学——国文学に進みたかったのに、保育の仕事から離れられなかったのは、結局母を他に離れたところから見るような場所に自分を置くわけにはゆかない、と思ったからのである。

それには、やはり子の側の我ままであり、本当の親思いのわざではなかったかもしれない。いつまでたっても、母のふところの広さ深さには至り得ないようである。

ただ、書くことだけは、いくらかなり母を満足させ納得させたことが、生前にも多少はあった。60歳前後ころから、よく原稿の代筆をしたが、三こと四言要点を言われて、四百字五、六枚はさらに、二、三十枚くらいを書いたことも幾度かあった。書いて「これでどう？」ときくと、「ああ、その通りよ、自分で書くより思った通り書けている」といつてくれ

たものであった。私の方でも、自分の文とは別に、できるだけ母の口ぶり書きぶりに似るように、若干の心づかいはいしたつもりで、しかし努力以上に母は満足してくれたようであった。それは私の書き上手であるより、母の優しさと素直さであったのであろう。母は少しでもよいことがあれば、素直に喜び感心するたちだったのである。学生の試験の採点なども、私よりもはるかに甘かった、……甘かったのではなく、長所をみとめるところが大きかったのである。

それでも、私が自分に許せるのは、僅かにそれだけで、ほかのことでは、——人間として到底母に及ばないし、その上、母のために何かをすることもほとんどなくて、却っておとなになってからまで、結局最後まで、してもらふことばかり多かった。それなのに、病床にあったときも慰めることも足りなかったと思う。——

今になって何ができるわけでもない、母のことを書いたところで、「うん、そうそう、その通りよ」と確認してもらへるすべもない。

しかし、及び難いのは承知の上で、母のこと、母の仕事、そして人となりの由つて来るところを幾らかなり叙べさせて頂くことにしたい。なおその上に、母の背後にある母……そ

それは私からいう祖母のこともあるようであるが、神のみ手に成るもの、そのみ手のはたらくところに存在するものとしての母性Ⅱ「母なるもの」「永遠に超えんとするもの」に回歸するところをおぼろげながらも^{うか}び上らせることができた、（つまり、私は母の背後におぼろげながら大きな普遍的な、個人としての母そのひとをも抱擁している「母なるもの」をいま覚えているので、……）と至らないことをもかえりみず、願っている。

I、系譜……その一

「わたくしの生涯を貫き支えているのは、聖書とフレールだ」と折にふれて言い言いついていた。

教育者として、キリスト者として、母親として、女性として、人間として、——動かしようもなく、確固たる姿勢で歩きつづけ、働きつづけた、福永津義^{つぎ}という人間。声高に、また大きな身振りで誇示したりは全くしな

いけれども、常に強烈な自覚を以て生き抜いた人間。人を教えても、その教えを集約するのに「愛児の自覚に立て」の一語を以てした、「神に愛され、親（人）に愛されている自己に目覚め、愛されている子どもの自覚を以て自分を生かし、自分のなすべきわざにいそしむ」ことを、人間の本分として我々とともに求めつづけた、その精神のあり様は、自ら言う通り、まさしく「聖書とフレール」に拠っている。

一八九〇（明治二三）年八月六日（戸籍面はいつのまにか五日になっていたという）、熊本県葦北郡津奈木の地に、徳永規矩^{のりかた}・うた（のちの通称信子^{のぶこ}）の二女、五人姉弟の次姉として生れ、小学校二年から、長崎・活水女学校（現活水学院）に学んだ。

「聖書とフレール」は、この出生と出身校によって、それ以外のあり様^{ようさま}のあるべき余地のない形で、彼女の人格を形成したと言える。

英語を学ぶつもりで入学した横浜英学校でジョン・バラ師に導かれ、当初は反撥しながらついに熱心なキリ

スト者になった規矩、明治初期、日本のプロテスタント・キリスト者の活動の草創期に、教育(学校)事業に、あるいは政界にも、大きな野望を抱き、そして当時不治の業病と恐れられた肺結核を病んで挫折、その病床にあつて著した「逆境の恩寵」の一書を以て、キリスト教界とは、却つて営むはずであつた学校事業にもまして大きな感化をもたらしたといわれる。その徳永規矩の女として、「聖書」は、真実「血肉の養い」と分ち難い「(精神の)糧」そのものであつた。

「キリスト者(の家)」の子であること、「肺病やみ」の娘であること、それはいずれも、いやでも強い自意識を強いるものであつたに違いない。どちらも、——後者は特に、忌み嫌われ恐れられる事態であつたし、前者にしても、奇異の眼でみられるのはまだしも、迫害されることもなしとはしない時代であつた。しかし、当の一家は、現実に「恩寵」のうちに生活していた。一家は、実際に聖書を呼吸し、聖書を食^はんで、生活していた観がある。

『人は自らその父母にもせよ師表にもせよ或は他の何れのものにもせよ、これを理想化して尊ぶことも出来ませう。また人々の追憶の中に生きている人は先づ最初に美化され、次で益々現実に遠ざかり、終に偶像化されることも少くないでございませう。』

しかし能力として心にせまり、心をうるほし、かつ私共の生涯を衷にあつて助くるものは単なる理想化された影のような性質のものではないと存ぜられます。』(かなづかい原文のまま)(傍点筆者)

と、津義自身(これは、私の代筆ではない)一九三一年の著「母の面影」のはしがきに記している、その『子供達の目に映じた父母は申すまでもなく世に所謂偉人でもなく女傑でもございせん。ただなつかしき人並の父母であつたのでございます。』(文字づかい原文のまま)

とものべられる、徳永規矩の一家同族にあつて、精神の養いと身体^{からだ}の養いは、今日の精神身体医学が認識している以上に、強烈に現実的な具体性をもつものであつた。

聖書は、奇跡的に病床の規矩を生かしつづけ、その子
女らを養った、……病い篤き規矩には、実際に聖書——
神のことは——のほか一匙さじの食も通らなかつた日々があ
り、医師の常識からは危篤を通り越して最早臨終と診断
される瀬戸際を、一度ならず二度ならず、生き抜いてい
る。

津義は、ごく稀にしか（生涯に私が覚えているかぎり
明らかではただ一度だけ、関係したことにふれたのは、
三度ばかり）口にしなかつたが、短い間ながら一家窮迫
のあまり、他家に預けられさらに学校の寄宿舎に入れら
れた期間があつて、それは悲痛にさびしい限りの思い出
であつたと思われる。あれほど強く「愛されている自
覚」をくり返し自他に求めた底に、「棄てられた」とい
つてはあまりに不当すぎるいいあらわしになるが、あた
かもそれに等しいほどの悲しみがあつて、しかも、それ
を愛されている実感に彫り込むほどの激しい精神のいと
なみがあり、その精神のいとなみのエネルギーは、まさ
しく父母の信仰と父母の人となりから享け継いだに違い

ないのである。

活水への入学が一八九七（明治三〇）年、小学二年七
歳の時で、上の姉、下の妹たちともに同じ時に寄宿舎
に入っているが、この寄宿舎入りは、前記の事情とは、
少くとも、当事者の心情としては全く別のものであつた
ようである。寄宿舎に入るには幼なすぎる年齢ではある
が、また、一家の経済事情がどれほども恢復していたわ
けではないこともそのように思われるが、活水の生活は
他家に預けられ（その延長として寄宿舎に入れられ）た
のではなく、学校に入学し寄宿生になつた、という、つ
まり帰るべき我家にたしかにつながつている安堵感のあ
る生活であつた。また、活水という学校こそ、徳永姉妹
にとつては、第二の我家ともいふべき抛りどころであつ
た。

活水学院は、一九七九年十二月一日、創立百周年記念
式をあげ、百年史を世に出している。同学院の歴史は、
勿論改めてこの小文のとりあげるところではない。た
だ、創立者ミス・エリザベス・ラッセルの信仰と人とな

りがまた、徳永姉妹にとつては、血肉の父母の信仰と人となりと間断するところのない、厳しさを失わぬ中に限りなく慈愛深い、優しくもまた頼もしくなつかしいものであったことは、抜き難い事実である。

「あなたは武士のむすめ。しっかりなさい」と折にふれて励まされたこと、宣教師どうしの会合の席でも

「このわたしのむすめたちは日本のむすめ、武士のむすめです」と紹介されたという、肖像にのこる面影にも、慈味あふれる中にどこか威風堂々ともいえる風格がしのばれるラッセル女史は、一面、ユーモラスな、素朴で温かい、その一身を捧げて伝道と教育に尽された日本の風土に、また歴史と人間に、心からの親愛を抱きつづけられた、まことに稀有な人間性の持主であられた。「ラッセル先生」を語るとき、如何にもなつかしように、どこか得意そうにさえみえる津義の口ぶりを、筆者はよく覚えていた。

ともあれ、キリスト者であること、聖書に養われたことは、津義の、血脈・骨格をつくり成した基本条件とし

て全く疑を容れないところであると同時に、彼女の人格を生き生きとしたものになっているキリスト教、そして聖書は、かなり独特な、ユニークな要素を帯びていることも考えられる。

ミス・ラッセルがそれを重んじて育てられたように、「武士のむすめ」の語に象徴される性情、あるいは、「明治の人間の気骨」と今日でもいわれる精神主義的な、胸を張り背すじをしゃんと立てている姿勢は、生涯を通しての津義の特徴である。

それもまた、まぎれようのない、父母譲りの特徴なのであった。

明治という、生を享けた時代の特徴も当然あるには違いない。しかし、同じ明治の人間の中でも、やはり相当に独特であると言えるのではないかと思う、……母方の系譜をたどると、中西純一（津義の母うたの父）があり、肥後藩主細川家に対等の客分と遇された八代城主松井家のまた客分たる中西家の当主として、郷党間に気鋭の志士とうたわれていたというが、維新までもない時期に階級

打破を唱え、ために刺客につけ狙われたことも一再ではなかったほど、進取英邁の氣象であつた。その識見は、長女うたを小学時代が終ると肥後八代から京都に、……同志社女学部に入學させたことでも示されている。當時では極めつきの進歩派、革新派だつたわけである。一方、津義の父規矩は、蘇峯、蘆花兄弟の從兄に當り、兄弟の父、規矩には伯父である徳富一敬の膝下に人と成つた、多分に國土的氣概をその資質に具えた人物であつたと推察できるようである。横井小楠、竹崎茶堂、といった人々も縁に繋る間がらであり、元田永孚・竹崎茶堂の門に學んだ年少時代には、むしろ、國粹的な氣風を養うこと大であつたのであらう。しかし、病を得た規矩は、ただ一つ人間性の核芯を貫く支柱を、キリスト教、というよりも、聖書が啓示する主イエスに見出したのである。

明治の氣風は、必ずしも單純ではない。

蘇峯と蘆花の間に共通するものと相反し相克するものの、……かなり世に知られているこの兄弟のあり様^{よう}だけ

を考えても、明治という時代、熊本、そして日本という風土の生み出した人間のある典型を見る思いがするが、規矩は、この二人と資質的に極めて近いものをもちながら、全く異質の人間性を築き上げている。どちらかといえば蘆花に親近するが、規矩の人間性は、蘆花よりは硬質というか剛毅であり、キリスト者として、鋭い省察に徹していた、と言えるように思う。

津義は、父母の双方の資性をうけて、一本氣で一途な追求者・求道者であつた。ものごとの核心に一気に迫り、枝葉についてはそれほど意を用いない（意に介さない）ところがあつた。

彼女の信仰は、「神は愛である」というその一点に、迷うことなく動揺することなく、びしっと焦点を合せている。ヨハネによる福音書第三章一六節、ヨハネの第一の手紙第三章一六節、たまたま同じヨハネ三の一六という聖書の二つの箇所を、常に大切にそしてよろこびを以て心に抱きつづけていたと思われる。（つづく）

（西南女学院）